

【雷】

いかづち はたた神 雷鳴

雲と雲、あるいは雲と地表との間の放電が光と音を発生する自然現象をいう夏の季語である。光だけをいう稲妻は秋の季語、気象庁の雷の定義にも光だけのものは含めていない。夏から秋にかけて、雨にともなう放電があると、空気中の窒素が大地に固定されて稲に栄養として供給されるから、放電は稲の妻であり、多い年は豊作になると言われる。

夏の雷は、上昇気流で発生する電位差で、激しく放電して熱雷と呼ばれる。それに対して、四季をとおして寒冷前線で発生するものが界雷、台風や低気圧圏内などで発生するのは渦雷という。

こまかく分解すると、雷雲から弱い先駆放電があり、地表から伸びる線条放電があり、それらがつながると主雷撃になる。電位差がなくなるまで放電が続く。夏の雷では一回の過程で一〇キロほどの範囲に何本もの電流の道ができる。雷鳴は落雷の衝撃音ではなく、放電の熱で空気の膨張が音速を超えた衝撃で発生する。

雷にまつわるその地域の文化がある。鯰起しなどの豊漁を知らせる雷もよく知られている。サンダーバードは、北アメリカ先住民の伝説上の巨大な鳥で、翼を打って飛ぶと雷を起こす。雷の多いのはブラジルで、毎年落雷で多くの死者が出るほどの被害がある。